

## 学生懸賞論文の総括

本年度の学生懸賞論文には、77編の応募がありました。残念ながら本数では昨年度を下回る結果となりましたが、しかし、内容においては例年に劣らぬ高いレベルの論文が寄せられたと言えるでしょう。論文について、何をもちって高いレベルというのでしょうか。

論文のレベルを向上させるために欠かせないのは、①明確な問題意識のもとに設定された自らの研究課題であり、作業としては、②膨大な量の資料収集や調査、またそれらの詳細な分析が必須であり、さらに、③自らの主張や見解を論理的かつ客観的に述べるという、表現力が求められると言えるでしょう。本年度は、77編中45編が予備審査を通過し、本審査を経て7編が入選となりましたが、これらの論文はいずれも先に述べたような諸要件を満たしていた秀作と考えることができます。特に、昨年度は出なかった優秀作を今年度の審査で得たことは、審査員一同の大きな喜びでもありました。

一方、選外となった論文も多くありました。その理由として多く指摘されたのは、解明すべき問題が不明瞭だったり、注記や引用文献に不備があったりと論文を書くうえで基本要件が欠けているという問題です。また非常に残念なことではありますが、ネットからの剽窃、いわゆる「コピー」が散見された論文も少数ながらありました。学問においては、先行する研究者に敬意を払いつつ、その業績を精査・評価したうえで、乗り越えや拡張を目指すという姿勢が不可欠です。今後、この懸賞論文に応募する、あるいは卒業論文や授業レポートに取り掛かる学生の皆さんは、常にこの点に留意していただければと思います。

ともあれ、この懸賞論文は、本学のよき伝統の一つとして数えることができるものです。学生の皆さんの向学心と具体的な取り組みが、この制度を支え、さらに一層発展させていく力となります。今回応募してくれた学生諸君に感謝するとともに、来年度以降の応募がますます増えることを期待しています。

最後に、本論集の刊行に至るまで、学生の応募論文を指導され、また本審査の依頼をご快諾くださいました諸先生方をはじめ、学部事務室、教務課、研究支援課の事務職員の皆様に多大なご尽力を賜りましたこと、厚く御礼申し上げます。

2014年3月

学生論集刊行委員会

松澤 俊二 (社会学部)  
伊代田光彦 (経済学部)  
長谷川 彰 (経営学部)  
清水 真一 (国際教養学部)  
的場かおり (法学部)